

第7章 住宅の和洋と各空間の起居様式

本第7章では、住宅の和洋と各空間の起居様式の問題を中心に分析・考察する。

建築の専門家の間では、すでに明治時代から住宅の洋風化についての議論があり、具体的に和洋折衷住宅が提案されたり、「中流住宅」のモデルとして西オーストラリアの軽便な住宅が紹介されたりしている¹⁾。アメリカ帰りの橋口信助が住宅専門の設計・施工会社「あめりか屋」を開設し、わが国最初の住宅専門雑誌『住宅』を刊行したり、フランク・ロイド・ライトに直接教えを受けた遠藤 新が活躍しはじめる頃には、洋風住宅に関する一般の人々の関心も広まりはじめていた。『婦人之友』誌にもこの二人の設計になるものをはじめ、洋風の郊外型一戸建住宅がたくさん紹介され、その合理性についても繰り返し述べられている。しかし結局は洋風住宅は、外国のものを直輸入したり、これらを学んで建築の専門家が提案した「居間中心型」住宅はそのままのかたちでは根づかず²⁾、和洋折衷のいわゆる「文化住宅」を生み出していくことになる。

「居間中心型」住宅が、『婦人之友』誌読者にあこがれをもって受けとめられながらも、そのままのかたちでは定着しなかった理由について、起居様式の面を中心にあきらかにすることが、本第7章の目的である。

方 法

住宅の平面図の分析の手順は、第5章に準じて、まず設計者の別によって分類した。本第7章ではそれに加えて、各室の起居様式を指標に、それぞれの住宅の平面図を<和室住宅>、<洋室住宅>、<混在住宅>に分類した。分類指標に各室の起居様式を用いた理由はつぎの2点である。第1の理由は、何よりも本研究の目的から、外観やスタイルというよりは、部屋の使い方やそれについての『婦人之友』誌読者の意見に注目するからである。2番目の理由は、資料上の制約から外観やスタイルが読みとれず、この点からの分類が難しいからである。『婦人之友』誌には住宅の平面図がたくさん掲載されているが、実際に建設されたことが確認できるものは、専門家による設計のもの、55例中48例、『婦人之友』誌読者による設計のもの、76例中14例である。第4章 第7節で見たように、『婦人之友』誌に記事や平面図が掲載された時点では、建設されていないものが多く、外観が読みとれないので、住宅の外観が洋風であるか和風であるかを判断することは難しい。

住宅の平面図の分析の手順はつぎのとおりである。

① 「和室」と明記された部屋の他、「タタミ」、「畳敷」などと記入されている部屋、平面図上にタタミの記号が記入されている部屋、また関連記事中から和室と判断できる部屋を[和室]とし、「洋室」と明記されている部屋、「板敷」などと記入されている部屋、テーブルやイスの記入されている部屋、また関連記事中から洋室と判断できる部屋を[洋室]とした。判断できないものは[不明]としたが、その数は比較的少なかった。

② ①の結果をもとに、全室が[和室]の住宅を<和室住宅>、全室が[洋室]の住宅を<洋室住宅>、[和室]と[洋室]とが混在する住宅を<混在住宅>とし、全住宅の平面図をこの3つに分類した。このとき、「女中室」、「書生室」、「次の間」、「予備室」、「玄関の間」、「臺所」、「収納」、「設備」などは分析対象室に含めなかった。

[和室]か[洋室]かの判断ができない部屋を含むために分類不能のもの、また2階の平面図が省略されているために分類できないものは<不明>としたが、その数は全体で8例と少なかった。

第1節 専門家の椅子式に関する意見

椅子式に関する議論は、明治時代の中ごろからみられる。なかでも矢橋賢吉の『本邦に於ける家屋改良談』³⁾での議論は、当時の建築の専門家の住様式の変容過程へのかかわり方を知るうえで、興味深い。矢橋賢吉が1903(明治36)年9月の建築学会の通常会で講演したものの記録であるが、そのなかで矢橋賢吉は「座食の習慣」をあらためることが必要であるとし、そのために「技術者が寄って(椅子式の)速成的な快活な経済的な衛生的な標準家屋」を考案することを提案している。合理的なシステムで標準家屋を安く大量に供給することができれば、国民を「引張」って椅子式に変えることは比較的容易であると論じ、「マーケットフォーム」などのシステムについても具体的に研究している。どこまでも「建築の上から習慣を見捨てさずするようにしなければならぬ」、「建築家が畳み好きでは仕方がない」とまで言っている。建築学会会長で当日の司会を担当している關野 貞も、日本人の座ることの習慣を変えることは矢橋賢吉の言うほど簡単ではないだろうとしながらも、やはり「此習慣を變へなむ以上は日本の家屋の改良は成就することが出来ない」と言いきっている。建築の専門家が積極的に椅子式を導入しようとしていたことがわかる。

また、1920(大正9)年に文部省の外郭団体として設立された「生活改善同盟會」の「住

住宅改善に関する委員会」が「住宅改善の方針」につづいて1921(大正10)年に発表し、「世間の参考に供せんと配布」した「住宅の間取及設備の改善」⁴⁾をみると、上から椅子式を普及しようとしていたことがわかる。生活改善の中心となるのは都市「中流階層」の家庭の「主婦」であるという認識から、家庭の「主婦」を対象に作成したもので、内容は具体的であり、表現は命令口調である。諸室の機能を明確にし、「共用室」と「専用室」とを分け、「共用室」は「椅子式に改めよ」という表現である。「児童室」も「必ず椅子式に改めよ」である。さらに「書齋の椅子式は当然である」、「廣さを増さずとも椅子式は可能である」という調子である。「生活改善同盟會」の活動が、単に生活の改善を呼びかけるだけではなく、組織的に普及・徹底をはかることに主眼をおいていることがわかる。

第一次世界大戦のあと、1922(大正11)年に上野公園で開催された平和記念東京博覧會に建築学会が「實物に如くはな」⁵⁾いとして実物展示した小住宅(14棟)の「出品要項」にも、その六に「居間、客間、食堂は必ず椅子式となすこと」が明記されている。

『婦人之友』誌でも、専門家は「勤め先の官庁會社等は西洋風でありますと、入っては和服の日本風をなし、出でゝは洋服の西洋風をなすという工合に、和洋兩用の衣服を要する譯で、實に不便極まる次第で御座います」(橋口信助：1911.8.P85)、「座敷は追々疊を廢して板の間にせねばなるまい。一略一今日學校や役所や事務所等、晝間働く所は皆椅子にかけるのに、獨り家庭だけが坐るといふのは矛盾した話である」(本多静六：1912.4.P20)など、主として①衣服との関係 ②役所や会社や学校の椅子式化による二重生活の不合理性 ③座式の起居の非能率性 の3点から住宅の起居様式を洋風に改めることを主張するものが多い。しかも記者の記事ではあるが「疊を廢するには先づ服裝から改めねばならず、服裝を改めるには疊があつては改まりません」(記者：1918.9.P22)、建築の専門家ではないが「折衷式を排し、思い切って西洋風に」(山本忠興：1922.10.P92)、「直ちに純粹の洋風住宅を採用する」(佐藤功一：1922.8.P23)のように、和洋折衷住宅というよりは、純粹な洋風住宅をよしとするものが多いことが特徴である。こうした専門家の記事は大正時代の中期までつづいている。専門家が大正時代中期まで椅子式を積極的に進めようとしていたことがわかる。

第2節 『婦人之友』誌読者の椅子式に関する意見

『婦人之友』誌読者の方も洋風の郊外型一戸建住宅へのあこがれがあったようで、椅子

式に対する評価は高い。その理由はいくつかに整理できる。

まず第1には、専門家が指摘するように、衣服との関係や二重生活の不合理性や椅子式の能率性などを認めていることである。「椅子テーブルに改めました所、自分ながら不思議なほどまめになりました」(1911.10.P92)、「坐ることによって私達の生活は、どんなに不活潑にされ、不健康にされて居るか知れません」(1921.4.P47)、「他家を訪問して一番困るのは、ズボンの膝を折つて座布團に座らせられること」(1925.1.P33)のように、歓迎をもって椅子式を迎えている。

これらに加えて第2番目には、衛生の面を指摘している。「洋風一略一衛生的なことで疊の埃から逃れることが出来」(1921.4.P45)、「夥しい塵のたまる疊は、我慢が出来ません」(1921.4.P48)のような記述がみられる。

そして第3番目には、掃除や雨戸の開け閉めなどの住居管理面からの指摘である。「南側が全部硝子窓になってゐて、椽側も雨戸もありません」(1916.6.P111)や、「雨戸の開閉一略一の手数を省」(1921.4.P37)くように工夫したところ、「一家打揃うて外出するとしても、別に雨戸を操るでもなく」(1911.8.P85)、「雨戸の開けたてがなく」(1930.11.P119)なり快適であるという体験が述べられており、ガラスの普及によって、しだいに雨戸や椽側の問題の解消がはかられていった様子が記されている。またこれは記者の記事ではあるが、「朝夕の蒲團の上げ下ろしもまた、我住宅の無駄な手数ですし而かも多くは特別に寢室のないため、何を措いても先づ床を上げ、そこを一通り掃除してからでないとは、晝の生活に移れません。このために失ふ時間と労力は一通りのものでないばかりか、これあるがために三尺の押入が必要になって、肝腎の住ひを狭くして居ります」(1918.9.P24)など、住居管理や生活の合理化などの点から洋風住宅の簡便性を指摘するものもある。

さらに第4番目には、伝統的な住宅の封建性を問題にし、これの解消をはかるために洋風化を進めようという意見もある。「在来の日本住宅では一略一玄關や客室に金をかけ、且つ家としての最良の位置を占めさせる一略一これらの訣點を除くには、何うしても根本的に改革して、西洋式を取り入れる方がよい」(1921.4.P39~40)、「玄關を少し廣く取り、椅子テーブルを据ゑて、そこで客に應接したらよい」(1921.4.P48)、「玄關を入った四疊半の板間に作りつけのベンチを設け一略一簡単な用談はこゝですませ」(1926.7.P165)のように、玄關の間を無くすこと、玄關を簡単な接客の空間に活用することも提案されている。玄關に卓子・椅子・ストーブなどを置いてホールとして活用している例(1914.4.P79)もみられる。床の間についても「床の間といふが如きものは略し」(1930.11.P35)。

「床を押入に」(1914.4.P69), 「床を一尺三寸程あげて, 上に畳を敷き, 坐蒲團を敷いて腰かけられるやうに」(1923.4.P93)工夫したもののや, 「飾棚などに」(1923.4.P93), 「書齋の床間の奥をいっばいに書棚にした」(1923.4.P93), 「床の違い棚の上下へ一段づゝ棚を入れて本棚に」(1922.11.P114), 「在來の不經濟な床の間は不必要です。いやしくもアパートに住む者には, こんなものに未練をもつやうな氣持は清算されてあるべきなのに, 同潤会は尚蟲様突起のやうな不用物を各戸に敢へてつけてある。私はこの空間を書棚に利用してしまひました」(1931.4.P134)のやうに書棚に活用するなどの工夫も具体的に述べられている。

実際に生活し, 日常の管理にあたっている者ならではの實感のこもった記述である。日常生活上の具体的な検証を経て, 「手のかゝる不便な日本家を洋館に改造」(1922.11.P112)していった様子が見える。

総じて『婦人之友』誌読者も住生活の洋風化には積極的な姿勢を示してはいるが, 建築の専門家が住宅全体を直ちに洋風化することを主張しているのに比べると, 『婦人之友』誌読者の議論は部分的であり, 「家の建て方は和式でも道具を洋式にすれば, 夜具・座蒲團を持ち運んだり, しまつておいたりすることがいらぬので大變廣々としていつも家の中が整つてみえます」(1926.4.P139)のやうに現実対応的である。

なかには「凡ての家がテーブル椅子にならない限り, 二重生活はまぬがれない」(1922.9.P117)と早急な洋風の普及を望む者もいるが, 一方では, 「眞に東西を融合した様式が現はれるには, 尚ほ餘程の年月を要する」(1922.11.P103), 「坐つて見たかつたり腰掛けを重寶なものと思ふやうな現在ではこの矛盾そのまゝがよい」(1933.10.P90), 「外觀を洋風にするのは, 敷地に相當ゆとりがない限り, 周圍の家との調和上差控へたがよい」(1922.11.P102~103)など性急な洋風化への躊躇もみられる。

第3節 住宅の和洋

建築の専門家が住宅全体を直ちに洋風化することを主張しているのに比べると, 『婦人之友』読者の議論は部分的であり, 現実対応的で, 早急な洋風化に躊躇がみられることは, 『婦人之友』誌読者が設計した住宅の平面図を専門家が設計した住宅の平面図と比べてみると, さらにはっきりする。

『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図を経年的にみると(表 7-1), 初期のも

のは、〈和室住宅〉が多かったが、しだいに〈洋室住宅〉も入ってくるようになり、やがて〈混在住宅〉が多くなる。

逆に専門家の設計した住宅の平面図は、最初は〈洋室住宅〉が多かったが、すこしずつ〈和室住宅〉がとりいれられるようになり、しだいに〈混在住宅〉が多くなる。

表 7-1 〈和室住宅〉、〈混在住宅〉、〈洋室住宅〉の経年変化(設計者の種類別)

	西暦(年)	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24	'25	'26	'27	'28	'29	'30	'31	'32	'33	'34	
	年号(年)	明治 ₄₁	42	43	44	45	大正 ₂	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和 ₂	3	4	5	6	7	8	9	
読者	〈和室住宅〉						14			1					3		1			1									
	〈混在住宅〉						3								3	3	7		1			2				1	4		
	〈洋室住宅〉														4	4	2											2	
	他・不明														1	1			1										
専門家	〈和室住宅〉																	1					1					2	
	〈混在住宅〉															1		7	1		5		4		1	2		3	
	〈洋室住宅〉				3													2	1							1	2		
	他・不明																1	2					1	1					

各室の機能と起居様式

L 居間

T 茶の間

D 食堂 食事室

R 座敷 應接室 客間 客室 など

S 書斎 主人室 など

M 主婦室 主婦部屋 など

B 寝室

A 老人室

C 子供室 子供部屋 小児部屋 など

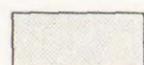
K 台所



和室



洋室



不明

1911(明治44)

1914(大正3)

『婦人之友』誌読者

住みよき家の間取圖其一

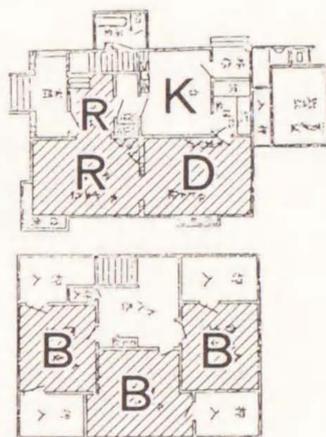
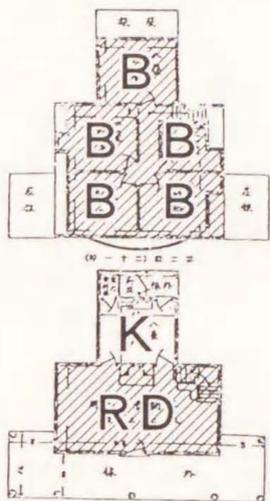
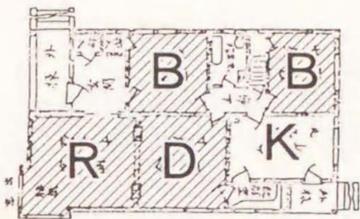


橋口信助
千五百圓で出来る洋風の住宅

橋口信助
千五百圓で出来る洋風の住宅

橋口信助
中等の洋風住宅

専門家



1914(大正3)

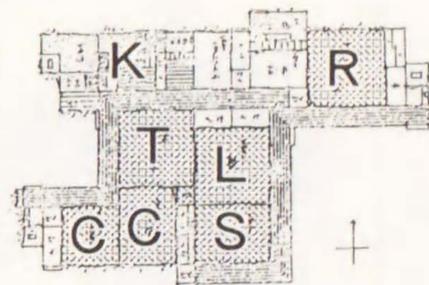
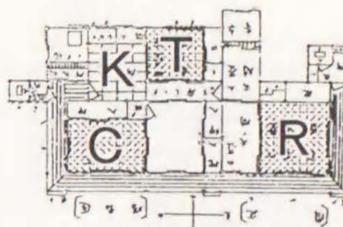
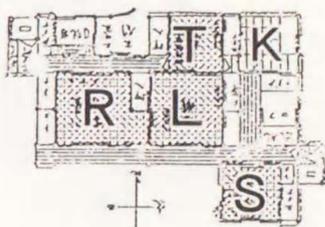
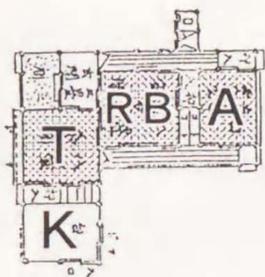
住みよき家の間取圖其二

住みよき家の間取圖其三

住みよき家の間取圖其四

住みよき家の間取圖其五

『婦人之友』誌読者



専門家

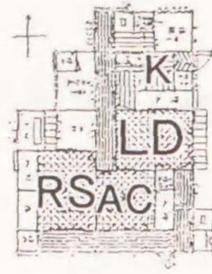
住みよき家の間取圖其六



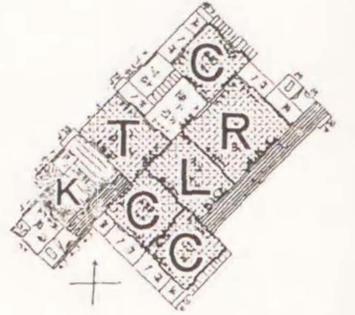
住みよき家の間取圖其七



住みよき家の間取圖其八



住みよき家の間取圖其九



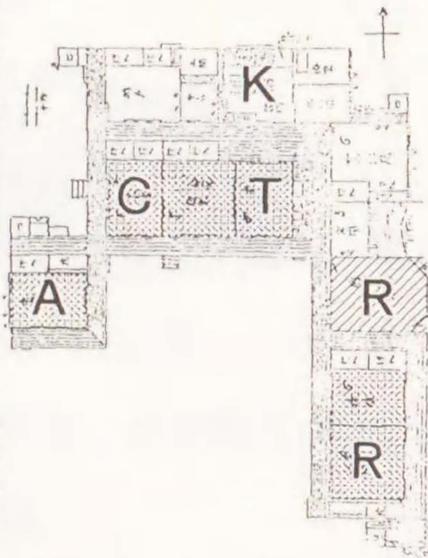
『婦人之友』誌読者

専門家

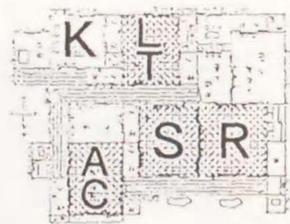
住みよき家の間取圖其十



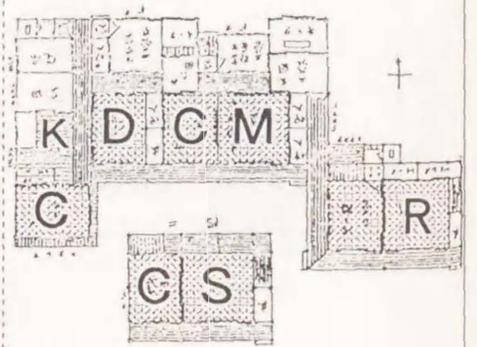
住みよき家の間取圖其十一



住みよき家の間取圖其十二



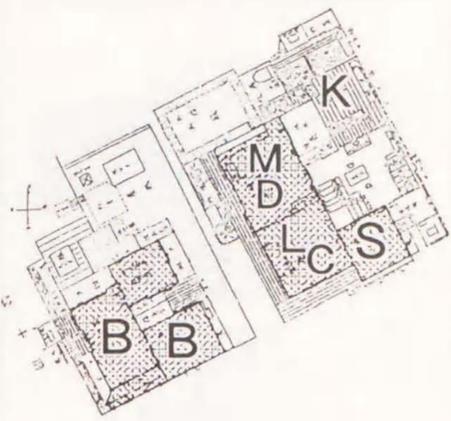
住みよき家の間取圖其十三



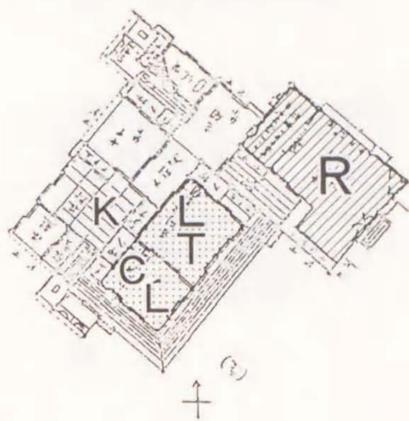
『婦人之友』誌読者

専門家

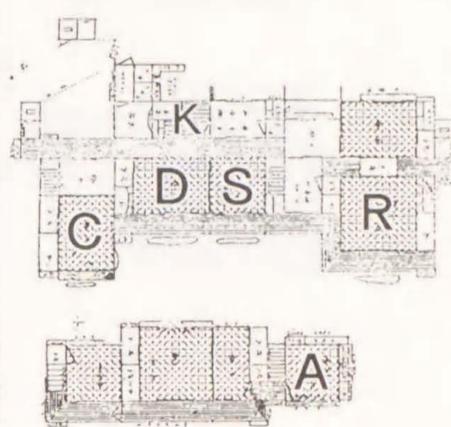
住みよき家の間取圖其十四



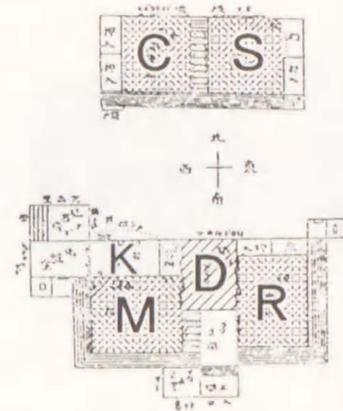
住みよき家の間取圖其十五



住みよき家の間取圖其十七



住みよき家の間取圖其十八

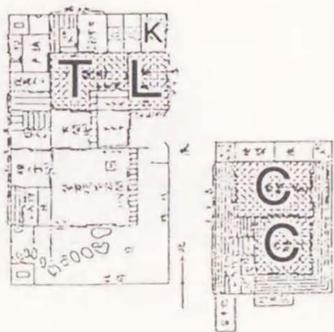


『婦人之友』誌読者

専門家

1917(大正6)

廿八坪の地面へ便利で器用な家

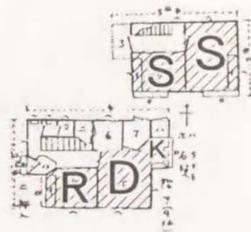


『婦人之友』誌読者

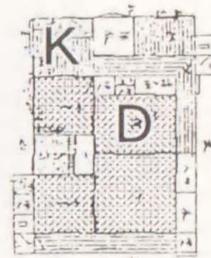
専門家

1921(大正10)

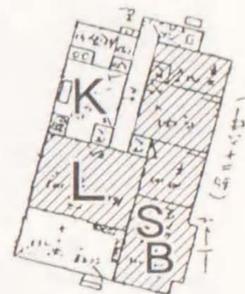
十五坪半の小洋館

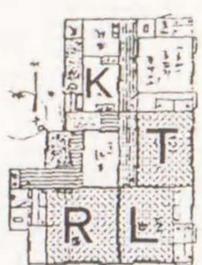
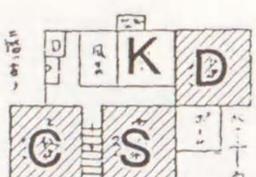
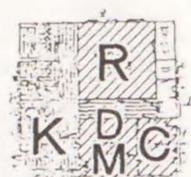
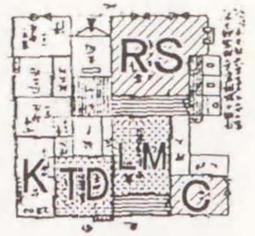


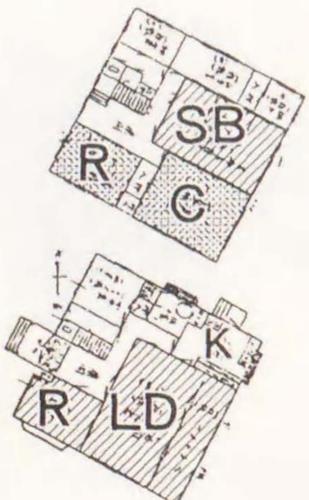
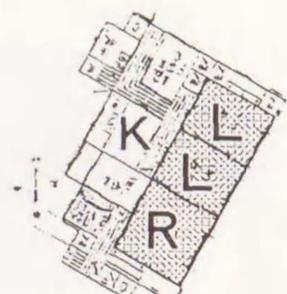
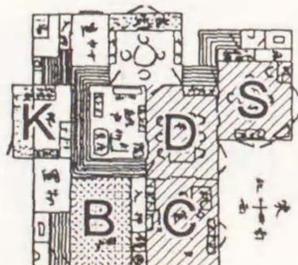
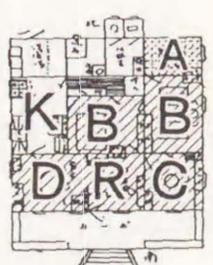
何んな住宅が欲しいか
小ぢんまりと片づいた家

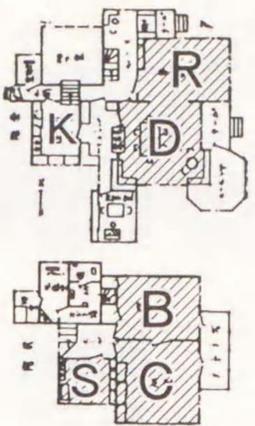
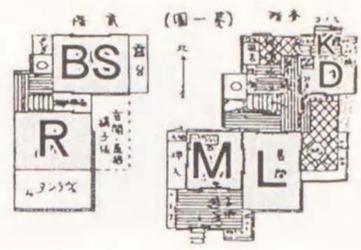
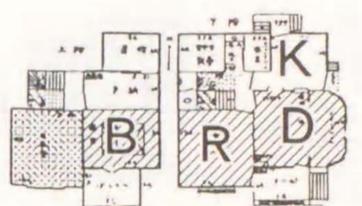
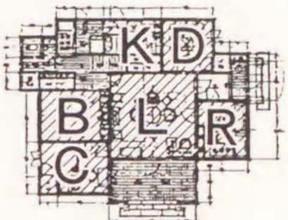


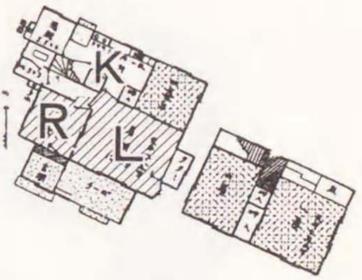
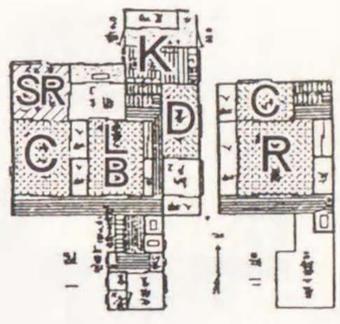
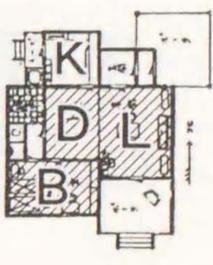
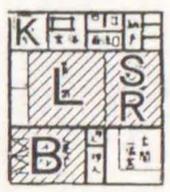
何んな住宅が欲しいか
バンガロウ式の家



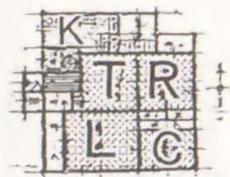
『婦人之友』誌読者	何んな住宅が欲しいか お客に偏した家	何んな住宅が欲しいか 文化的住宅	何んな住宅が欲しいか 翻譯された家	何んな住宅が欲しいか 家族本位の簡易住宅
		 2F:略	 2F:略	
専門家				

『婦人之友』誌読者	何んな住宅が欲しいか 暖かさうな小洋館	何んな住宅が欲しいか お客に偏した家(2)	何んな住宅が欲しいか 私の望んで居る住宅	何んな住宅が欲しいか 米國で建てる積りの家
				
専門家				

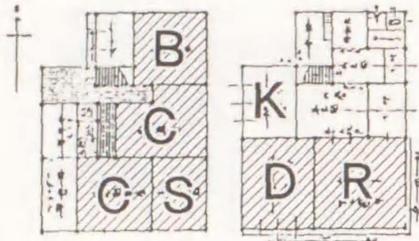
『婦人之友』誌読者	<p>理想と實際の小住宅 私の頭に熟した理想の家</p> 	<p>理想と實際の小住宅 狭い臺所と別荘案</p> 	<p>理想と實際の小住宅 小さく工夫した家</p> 	<p>理想と實際の小住宅 惣本家としての隠宅</p> 
専門家	<p>大熊喜邦 平和博覽會に出品さるべき作品</p> 			

『婦人之友』誌読者	<p>理想と實際の小住宅 小さな折衷式の家</p> 	<p>理想と實際の小住宅 低金利で建てる家</p> 	<p>理想と實際の小住宅 理想の生活の出来る家</p> 	<p>理想と實際の小住宅 紙に書いた家</p> 
専門家				

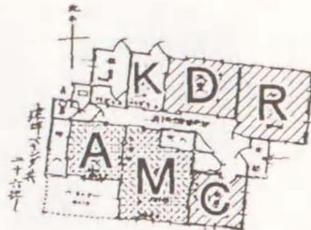
住宅建築問答
小住宅の建築費



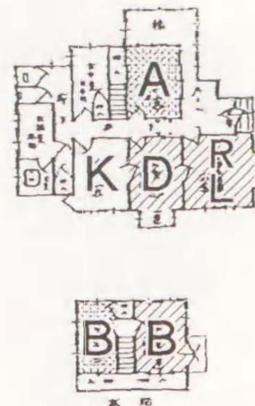
住宅建築問答
日本室よりも洋館に



住宅建築問答
垂鉛葺屋根の住宅

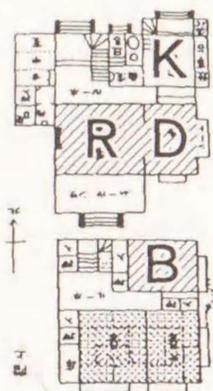


住宅建築問答
小さな西洋館



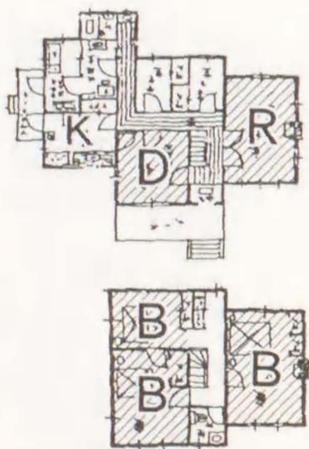
『婦人之友』誌読者

埴谷長次郎
わたくしどもの家
(武井千代)

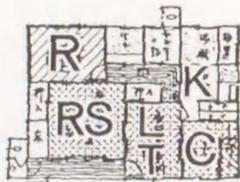


専門家

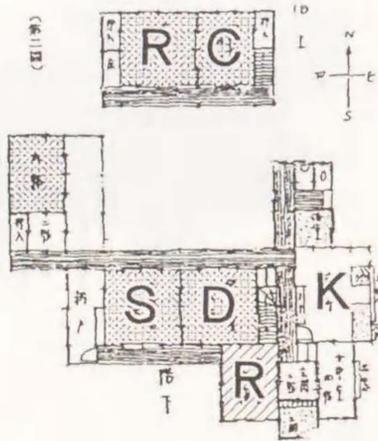
住宅建築問答
衛生的な住宅



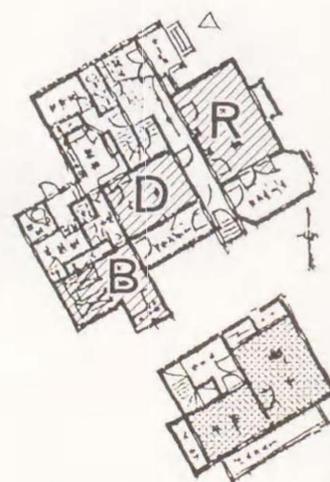
住宅建築問答
郊外へ建てる家



住宅建築問答
雪國の住宅建築

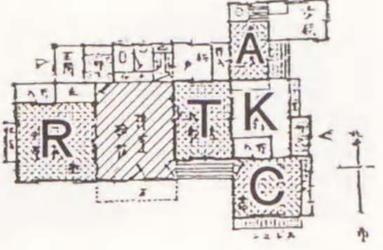
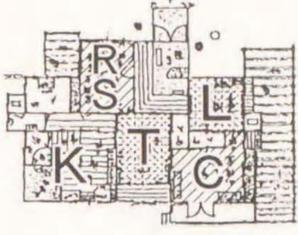
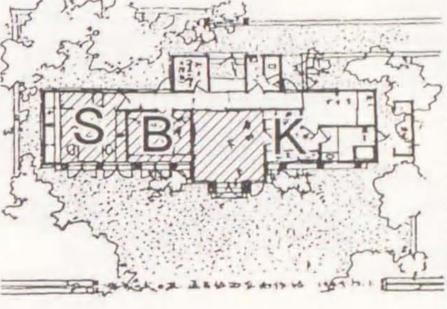
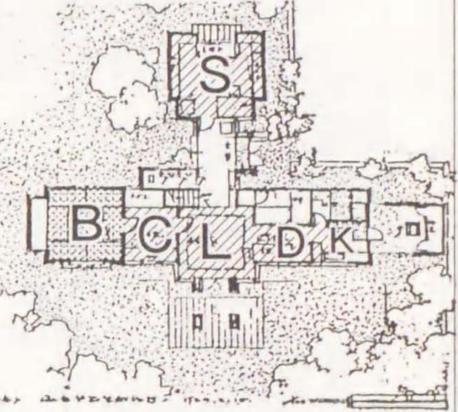


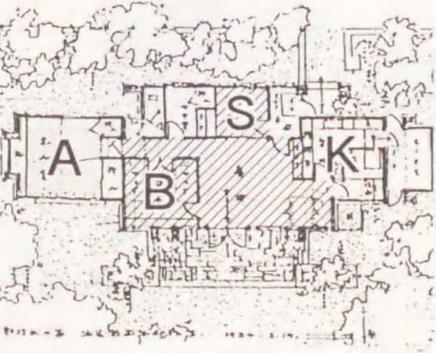
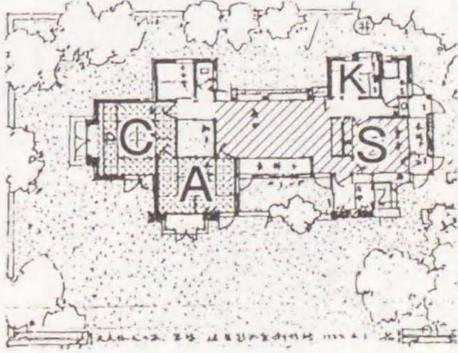
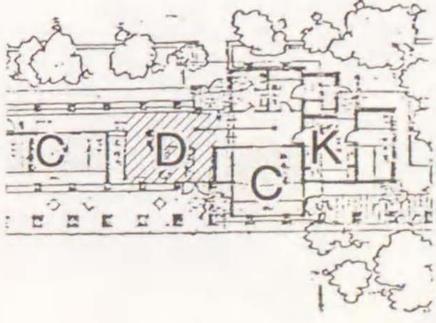
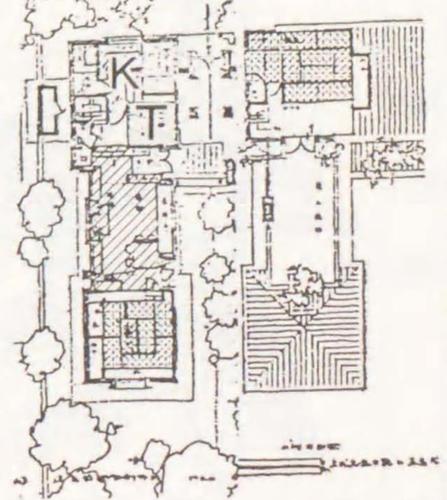
住宅建築問答
洋風住宅の私案



『婦人之友』誌読者

専門家

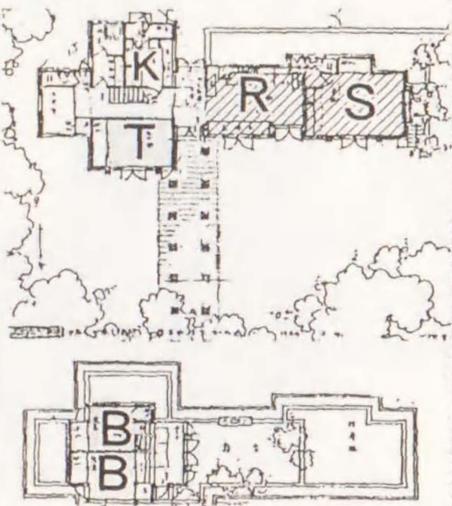
		1923(大正12)		1924(大正13)	
『婦人之友』誌読者	住宅建築問答 郊外の田園住宅	住宅建築問答 家族本位の住宅			
					
専門家			遠藤 新 住宅小品15種 一文字の家 安成氏の家	遠藤 新 住宅小品15種 一文字よりT字に 静かな書齋の家	
					

		1924(大正13)			
『婦人之友』誌読者					
専門家	遠藤 新 住宅小品15種 一文字の家の變化その1	遠藤 新 住宅小品15種 一文字の家の變化その2	遠藤 新 住宅小品15種 三間幅の家と子供たちの寄宿舎	遠藤 新 住宅小品15種 三間幅の家と子供たちの寄宿舎	
					

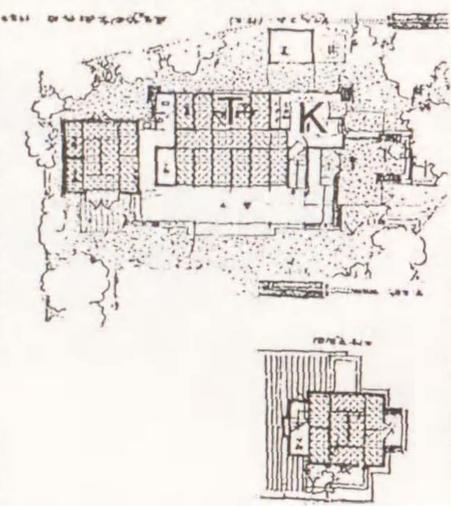
『婦人之友』誌読者

専門家

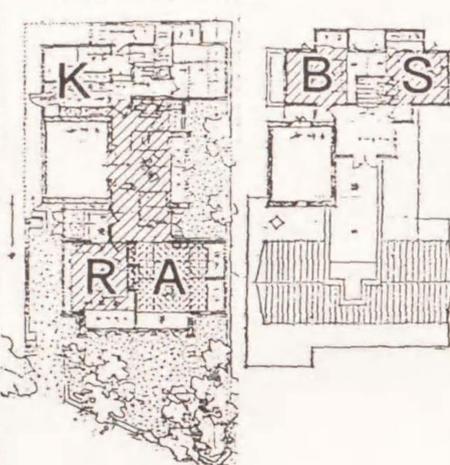
遠藤新住宅小品15種
三間幅の家の變化二



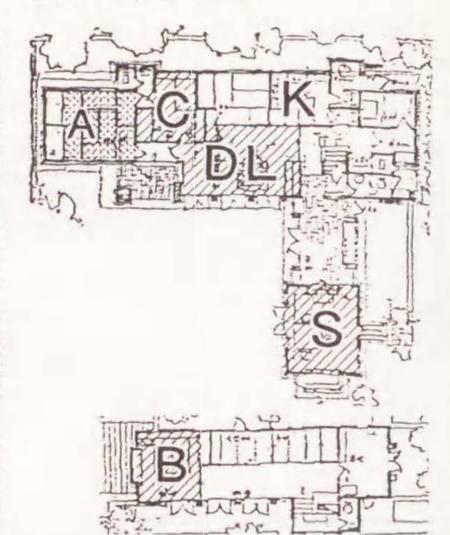
遠藤新住宅小品15種
子供中心の大部屋



遠藤新住宅小品15種
二段陣の町の家



遠藤新住宅小品15種
屋根の見えぬ家



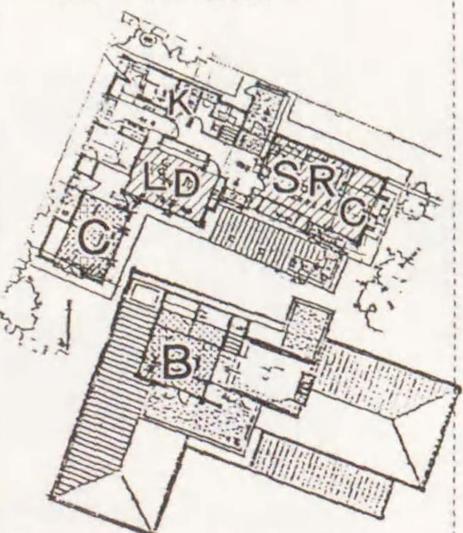
1924(大正13)

1925(大正14)

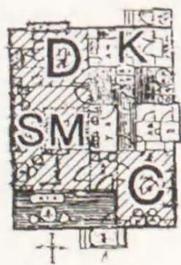
『婦人之友』誌読者

専門家

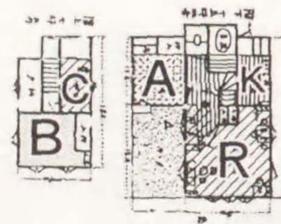
遠藤新住宅小品15種
三間幅の家の變化三



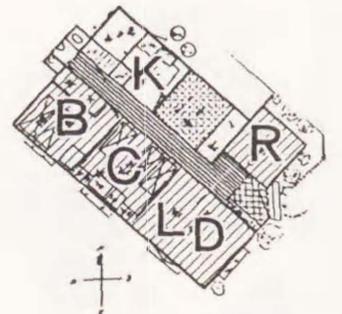
木檜恕一
小住宅の間取りと寢室の新しい設備



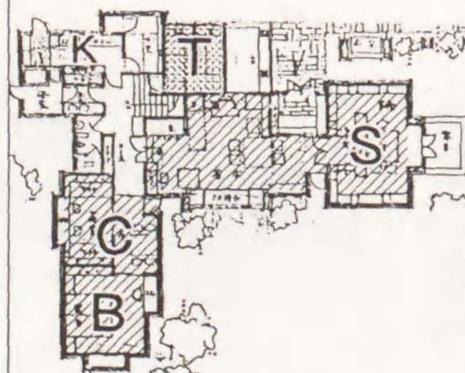
狭い建坪を上手に工夫した家



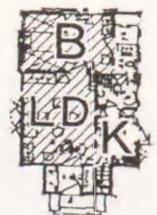
素人設計の平凡な家

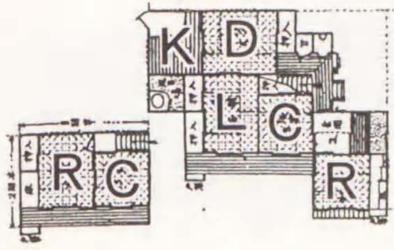
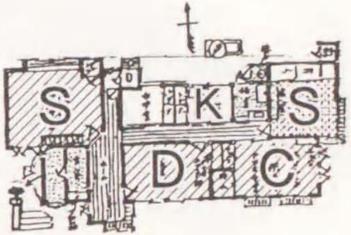
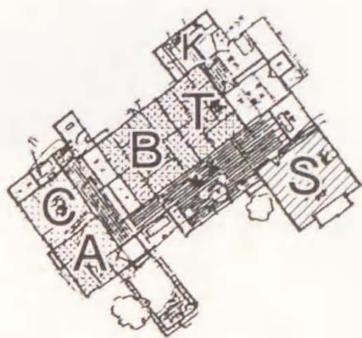
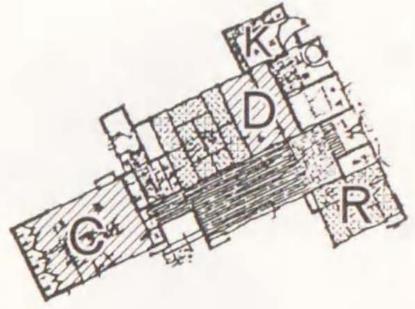


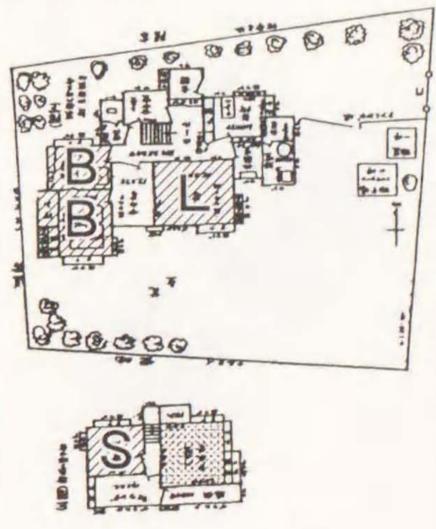
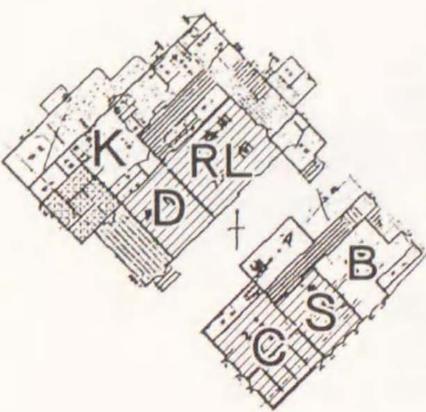
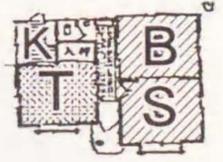
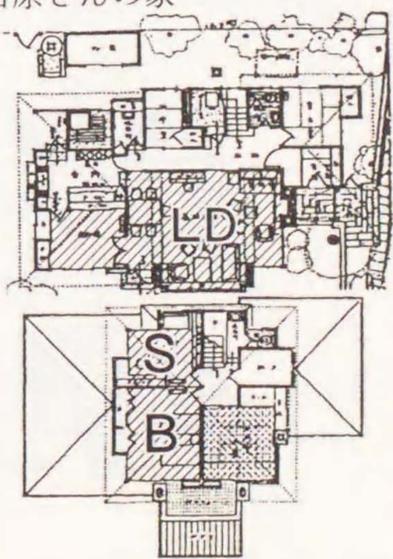
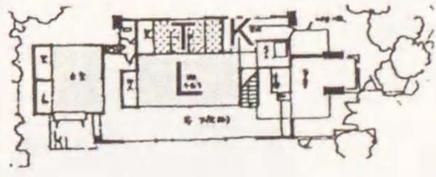
遠藤新住宅小品2種



ヴォリス 十二坪の住宅



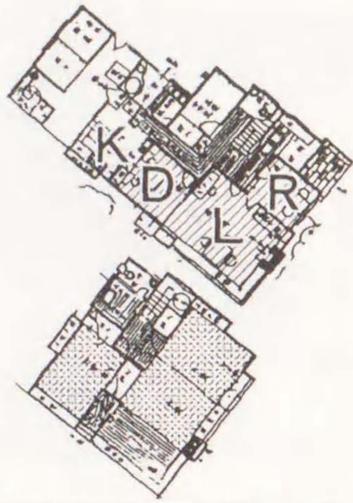
		1926(大正15)	1927(昭和2)	
『婦人之友』誌読者	家族八人の住宅設計の批判 (読者案)			
	専門家	大内章正 砧村に建てた私たちの家 らいてり		遠藤 新 三四千円で出来る 小住宅設計 高橋 泰氏の住宅設計圖
				遠藤 新 三四千円で出来る 小住宅設計 黒崎貞彦氏の設計圖
				

		1927(昭和2)	1928(昭和3)	
『婦人之友』誌読者			家を建てるまで 素人設計で 出来た我家	南澤に建った小脇氏の家
				
専門家	今 和次郎 千圓と千五百圓 の住宅 千五百圓の住宅	遠藤 新 石原さんの家	遠藤 新 有川君の家	
				

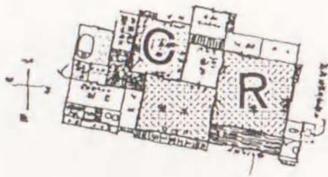
『婦人之友』誌読者

専門家

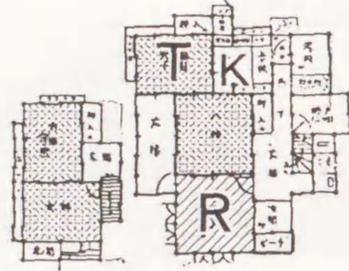
遠藤 新
新しい木綿の浴衣の家
(羽仁家)



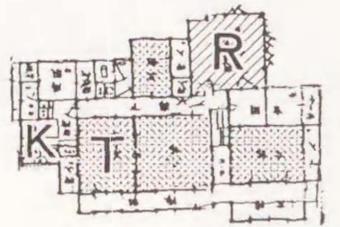
櫻井省吾
小住宅の間取



同潤会 東京郊外に建った同潤会分譲住宅A型



同潤会 東京郊外に建った同潤会分譲住宅B型



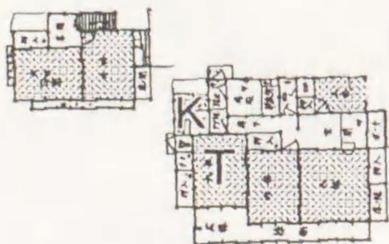
1929(昭和4)

1931(昭和6)

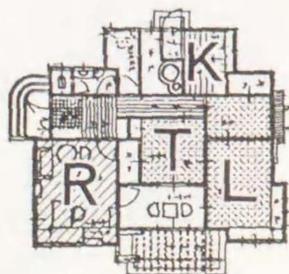
『婦人之友』誌読者

専門家

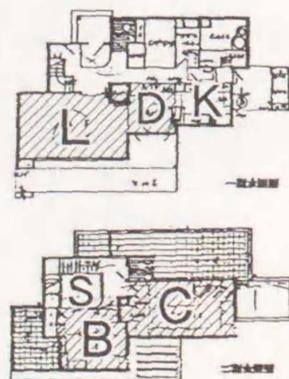
同潤会 東京郊外に建った同潤会分譲住宅D型



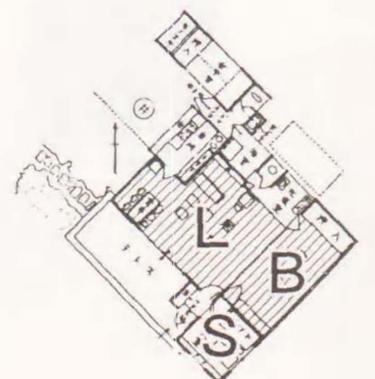
ガン・イウラ
近代模範小住宅朝日6号型



土浦亀城
南澤に建った大脇さんの家

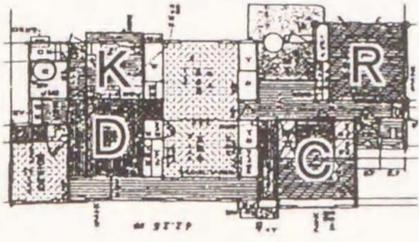


遠藤 新
二十二坪の住居
(遠藤 新自邸)



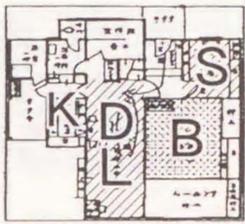
『婦人之友』誌読者

素人の工夫を生かした家
南澤に建った中村貢氏の家

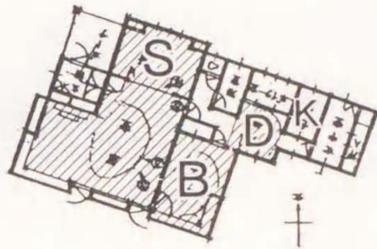


専門家

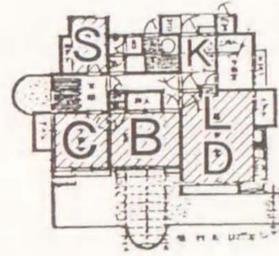
遠藤 新
二十二坪の小住宅



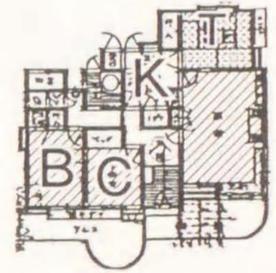
遠藤 新
南澤の美しい林の中に建った
田中さんの家



石川 徹 まことの隣人友の
會々員の住宅を設計監督して
植村家

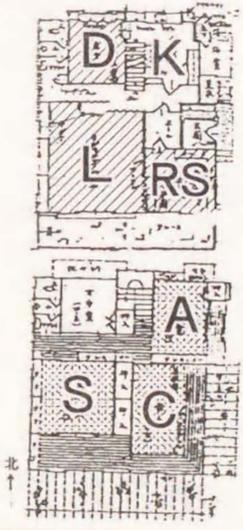


石川 徹 まことの隣人友の
會々員の住宅を設計監督して
芦川家

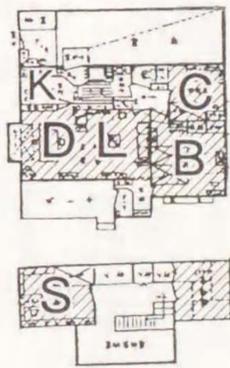


『婦人之友』誌読者

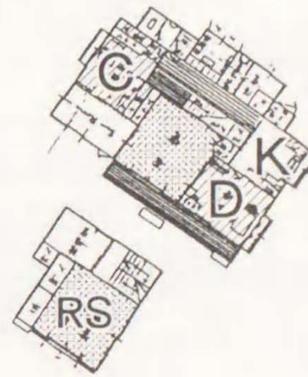
理想の我が家
健康的な子供本位の家



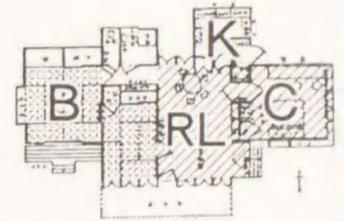
理想の我が家
家具の配置を工夫した家



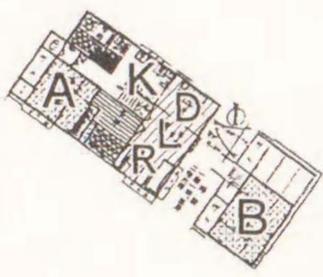
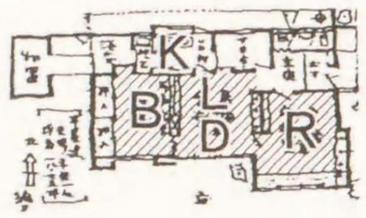
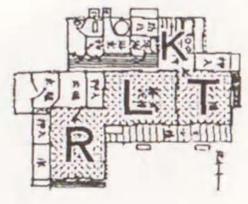
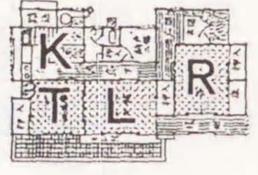
理想の我が家
經濟能率簡素



理想の我が家
簡単な家を



専門家

		1933(昭和8)		1934(昭和9)	
『婦人之友』誌読者	理想の我が家 二十坪半の小住宅	私共の家			
	専門家			同潤会 小住宅展覧會同潤會江古田分 譲宅をみる 1型	同潤会 小住宅展覧會同潤會江古田分 譲宅をみる 2型
					

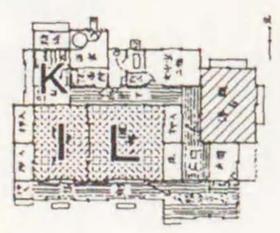
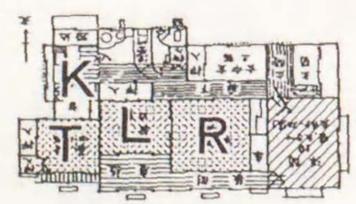
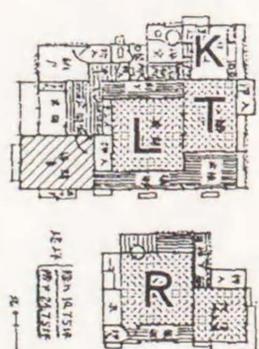
		1934(昭和9)			
『婦人之友』誌読者					
	専門家	同潤会 小住宅展覧會同潤會江古田分 譲宅をみる 3型	同潤会 小住宅展覧會同潤會江古田分 譲宅をみる 4型	同潤会 小住宅展覧會同潤會江古田分 譲宅をみる 5型	
					

図 7-1 各室の機能と起居様式

この時代の『婦人之友』誌にもっとも多く多くの住宅の平面図を掲載している建築家は遠藤新で、1924(大正13)年から1932(昭和7)年までの間に20例の作品がみられる。遠藤新は、帝国ホテルの設計にたずさわる日本人スタッフの一人として、フランク・ロイド・ライトに直接指導を受けた建築家であり、1917(大正6)年にはアメリカのライトのアトリエを訪ねている。羽仁もと子夫妻とも親交があったようで、自由学園の設計にもかかわっているが、羽仁家も遠藤新が手がけている。ライトの弟子であり、アメリカに渡った経験をもつ遠藤新の作品は、『婦人之友』誌に掲載されているものについては洋風住宅が多く、和室をもつ場合でも「老人室」、「子供室」などとして1室程度をとりいれただけのもの(図7-2)であったが、1929(昭和4)年に「『新しい木綿の浴衣』の家」(図7-3)と題する羽仁家を設計した頃から、比較的和室の多い「混在住宅」が多くなる。羽仁家そのものも4室の和室をもつ「混在住宅」である。

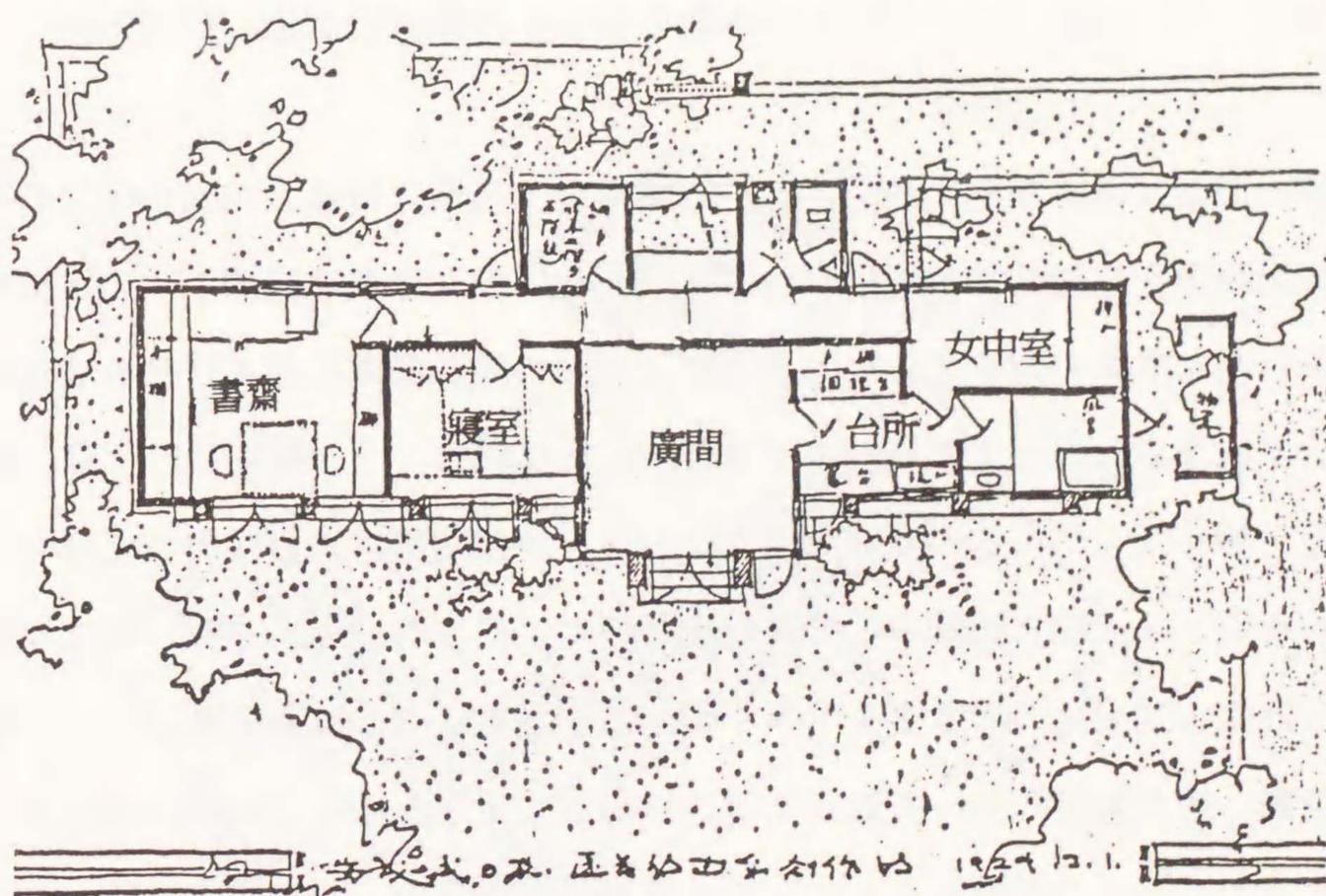


図 7-2 遠藤新 住宅小品15種 一文字の家 安成氏の家(1924)*

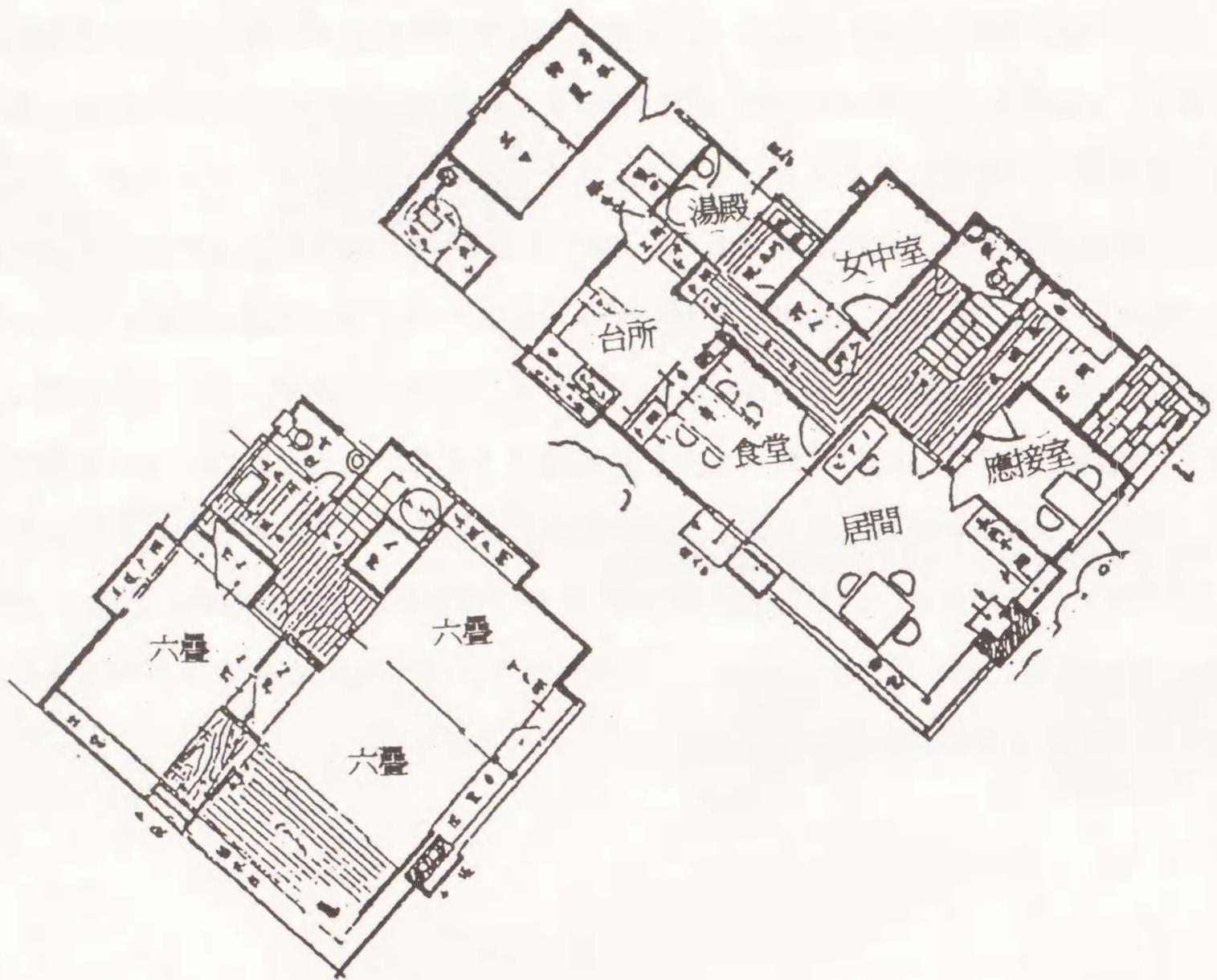


図 7-3 遠藤 新 『新しい木綿の浴衣』の家（羽仁家）（1929）*

内田青蔵の著書『あめりか屋商品住宅』によると、遠藤 新は、1925(大正14)年にあめりか屋の技師長山本拙郎と住宅観について、いわゆる拙新論争を展開し、山本拙郎の「住宅は住み手と共に成長・完成するものなのに、遠藤の設計態度に従えば住み手は統一されたデザインに拘束され自由を奪われてしまう」との批判に、「一般には、人は、漫然と物を見、漫然と物を買って居るのだ。その人たちに、私が建築によってそれだけでも眼を開き得たということは、即ち建築の力であり、建築の手柄—略—よい建築—住宅建築と限ってもよい—とは人間生活の環境として人を教へるに足る底の作品」と豪語しているというが、その遠藤 新が和室の多い「混在住宅」を設計するようになるには、羽仁もと子夫妻や『婦人之友』誌読者の影響もあったものと思われ興味深い。昭和時代に入ってから遠藤 新が設計した「三四千圓で出来る小住宅の設計」⁶⁾ (図 7-4, 7-5) は、和室の多い住宅平面図となっている。

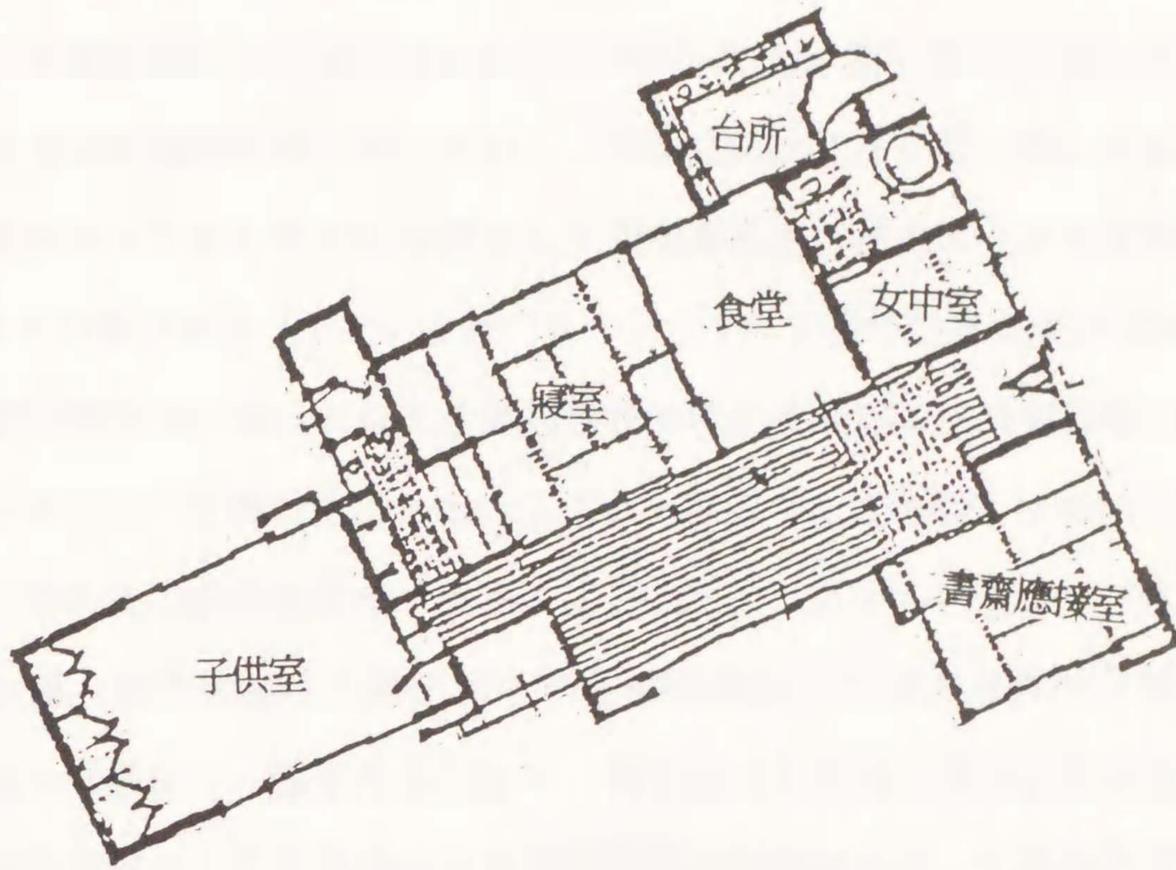


図 7-4 遠藤 新 三四千圓で出来る小住宅の設計 黒崎貞彦氏の設計圖(1927)*

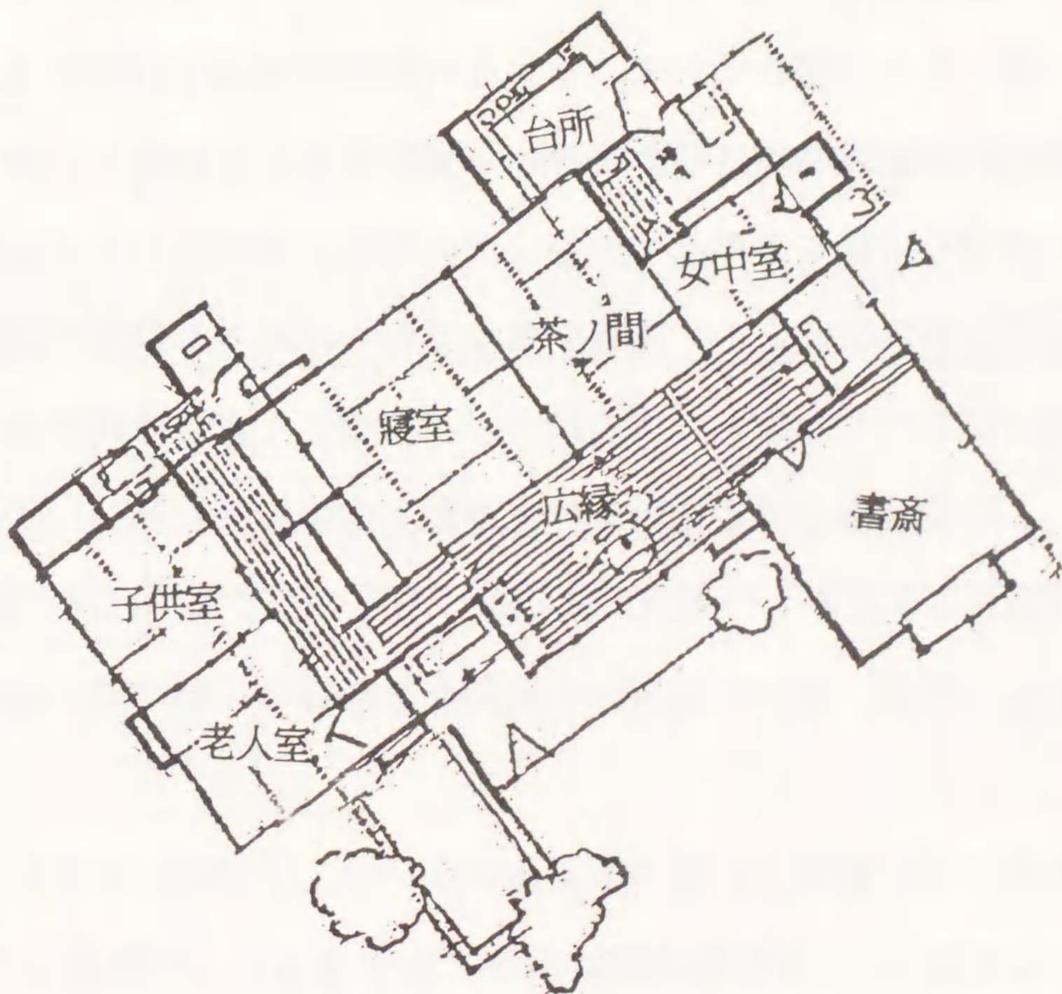


図 7-5 遠藤 新 三四千圓で出来る小住宅の設計 高橋 泰氏の住宅設計圖(1927)*

また『婦人之友』誌には、橋口信助の設計した住宅もみられる。1911(明治44)年から1913(大正2)までの間に5例の橋口信助の作品が紹介されている⁷⁾。橋口信助はアメリカでの生活経験から組立住宅を持ち帰り、これを当時の日本の中流階層に普及しようとした人物であり、彼が『婦人之友』誌で紹介している住宅には洋風住宅が多い。なかには、施主の希望で和室をとりいれたものもあるが、アメリカ直輸入のスタイルを基調とする住宅が多い。橋口信助は家庭雑誌の香りのする住宅専門雑誌『住宅』を自ら発行するようになった1916(大正5)年以降は、『婦人之友』誌には投稿していないので、彼の住宅がその後どう変わっていったかを『婦人之友』誌だけであとづけることは難しい。しかし、内田青蔵がこの時代のあめりか屋の住宅を、前出の著書『あめりか屋商品住宅』のなかで西洋館の和風化という視点で描いており、当時の様子をうかがうことができる。橋口信助は1921(大正10)年に至ってもなお「洋風は知識階級のシンボル」と述べているが、施主との交渉や『住宅』読者の影響で、あめりか屋の住宅は折衷化・和風化せざるをえなかった様子が見える。

第4節 だんらん空間の起居様式

つぎに、こうした<混在住宅>化がどのように進んでいったかを詳しくみるために、だんらん空間、接客空間、私室空間について、それぞれの起居様式を分析する。

だんらん空間を住宅の平面図や室名呼称だけから特定することは難しいので、関連記事をも含めてだんらん空間を捕捉する手だてをとった。関連記事からだんらん空間が特定できる住宅はその部屋を分析対象室とし、関連記事などからだんらん空間が特定できない住宅については、「茶の間」、「食堂」、「居間」、「廣間」などの呼称のある部屋すべてを分析対象室とした。分析対象となる部屋すべてが和室の場合は<和>、すべてが洋室の場合は<洋>、和洋両方の部屋をもつ場合には<両>とした。<両>には、和室の「居間」と洋室の「食堂」をもつ住宅、または洋室の「居間」と和室の「茶の間」をもつ住宅などが含まれる。

だんらんの空間としては「居間」に関する記述が多いが、「居間」の使い方は、「主婦部屋を兼ね」(1921.4.P38)、「食堂兼居間に用ひ、お客様もこゝで應接」(1921.4.P39)のように複雑で兼用的に使われているものが多く、一様ではない。室名呼称をみても「居間兼食堂」、「居間兼應接間」のように兼用をうかがわせるものが多い(概して洋室の

「居間」は接客室を兼用し、和室の「居間」は「主婦室」、「子供室」などを兼用しているものが多い。「居間」という呼称の用法については、主人または夫人の居室、あるいは単なる居室をさすとみられるものもあり、平面図の上からだんらん空間としての「居間」を特定することは技術的に難しい。また、この時代には食事空間のだんらん空間化の傾向がみられることから、ここでは「食堂」、「食事室」や「茶の間」をだんらん空間に含めて分析する。

『婦人之友』誌読者の設計したものは、最初の頃には多くの住宅が<和>のだんらん空間をもっていた(表 7-2)が、しだいに<洋>のだんらん空間をもつものが増えはじめ、やがて<両>のだんらん空間も出てくる。

上述のとおり、生活改善同盟會もとりわけ共用室には椅子式を推奨しており、『婦人之友』誌読者にも「居間 十疊の板張りとし、椅子卓子を用ひ、食堂兼居間に用ひ、お客様もこゝで應接します」(1921.4.P40)、「居間を椅子式にして、そこに住居の殆ど大部分一應接間、食堂、書齋一を背負はせて見ました」(1925.1.P142)など、椅子式のだんらん空間への期待はみられるが、一方で「居間(主婦室兼用)(6疊) この室のみは家人の希望により純日本式とし、障子と襖で圍ひ」(1921.4.P38)、「居間と茶の間は疊敷」(1923.11.P165)、「居間 八疊の日本間」(1933.10.P96)のように、<和>のだんらん空間への要望も根強い。

表 7-2 だんらん空間の和洋の経年変化(設計者の種類別)

西暦(年)		'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24	'25	'26	'27	'28	'29	'30	'31	'32	'33	'34
年号(年)		明治 ₄₁	42	43	44	45	大正 ₂	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和 ₂	3	4	5	6	7	8	9
読者	< 和 >							16			1				4	1	5			1							1	
	< 両 >																									1	1	
	< 洋 >							1							6	6	5		1			2					4	
	他・不明														1	1			1									
専門家	< 和 >																	1			2		4				5	
	< 両 >																	1	1							1		
	< 洋 >					3										1	1	9	1		3		1		2	3		
	他・不明																	1				1	1					

これに対して、専門家の設計した住宅のだんらん空間は、最初の頃には<洋>ばかりであったが、すこしづつ<和>のだんらん空間がみられるようになり、やがてはむしろ<和>のだんらん空間が多くなる。和室の多い同潤會の分譲住宅が含まれるためであるが、同潤會の分譲住宅以外にも<和>や<両>のだんらん空間をもつものがあり、『婦人之友』誌読者の<和>のだんらん空間の評価が影響を与えたことも考えられる。

なお、「茶の間」はこの当時、すでに広く普及していたものと考えられ、「茶の間」の使い方を特にとりあげた記事は見あたらないが、「茶の間」をもつ住宅の平面図には「食堂」、「食事室」などはほとんどなく、逆に「茶の間」をもたない住宅の平面図には「食堂」か「食事室」かどちらかがあるものが多いことから、少なくとも「茶の間」は食事空間としても用いられたものと考えられる。そこで食事空間として、「食堂」、「食事室」、「茶の間」などをとりだし、その<和>、<両>、<洋>をみると、『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図では、大正時代中期まではほとんどが<和>であるが、だいに<洋>の食事空間が多くなっている。だんらん空間の<両>が多くなるのは、洋室の「食堂」などと和室の「居間」とをもつものが増えた結果であることがわかる。

第5節 接客空間の起居様式

接客空間については、室名呼称から「座敷」、「應接室」、「客間」などをとった。「廣間」や「書齋」も接客にも用いられていたものが多いようであるが、家族だんらんの空間や私室空間など、他の用途に用いられているものもあるので、ここではそれらはとらなかつた。これも対象となる部屋すべてが和室の場合は<和>、すべてが洋室の場合は<洋>とした。和洋両方の接客空間をもつ場合には<両>とした。

『婦人之友』誌読者の設計した住宅では、最初の頃には<和>の接客空間が多かつた（表 7-3）が、1921年から<洋>の接客空間が多くなる。接客空間の洋室化傾向が顕著である。洋風住宅への強いあこがれを表現したものであろう。ちなみに、1921年は、生活改善同盟會が「住宅の間取及設備の改善」を發表した年であり、少なからぬ影響があつたものと考えられる。

専門家の設計した住宅には、「座敷」、「應接室」、「客間」などの呼称の部屋をもたないものが多いが、これらの呼称のある部屋をもつ住宅については、全体的に<洋>の接客空間が多くなっている。昭和時代に入ると<和>の接客空間が増える。「座敷」をそなえた同潤會の分譲住宅が含まれるためである。

表 7-3 接客空間の和洋の経年変化(設計者の種類別)

西暦(年)		'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24	'25	'26	'27	'28	'29	'30	'31	'32	'33	'34
年号(年)		明治 ₄₁	42	43	44	45	大正 ₂	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和 ₂	3	4	5	6	7	8	9
読者	< 和 >							14							2		2			1							1	
	< 両 >							1								1	2											
	< 洋 >							1							5	5	6		2			1				1	4	
	他・不明										1				4	2						1					1	
専門家	< 和 >																				1		1				4	
	< 両 >																											
	< 洋 >				3											1	1	3						4				
	他・不明																	9	2		4	1	1		2	4	1	

第6節 私室空間の起居様式

私室空間には、室名呼称から「寢室」、「子供部屋」、「老人室」などをとった。住宅の平面図中にこれらの呼称がまったくみられない住宅や、「老人室」、「子供室」のみしかみられない住宅があり、他の部屋の私室への転用は十分に考えられるが、ここではそれらをとらなかつた。また、「書齋」もかなりたくさん出てくるが、接客の機能をもあわせもっているものが多いので、ここでは「書齋」は私室空間には含めなかつた。同様に、「主婦室」、「主婦居間」などがたくさんみられるのもこの時代の特徴であるが、多くの「主婦室」は主婦の居室や家事室としての機能のほか、子どもの遊び場や家族だんらんの機能を兼ねている多目的なものなので、これも私室空間には含めなかつた。そのためここで述べる私室空間とは、専用の性格の強い私室空間ということになる。

これも対象となる部屋すべてが和室の場合は<和>、すべてが洋室の場合は<洋>とした。和洋両方の部屋をもつ場合には<両>とした。

『婦人之友』誌読者の意見としては、「寢室 現在の私たちの生活としては畳敷が良いでせう」(1921.4.P41)、「大部分を椅子式にしました。唯だ寢室兼病室は、いろいろの都合から日本室にしました」(1921.5.P60)というように、私室空間の和室志向は強かつたようである。

実際に住宅平面図をみても（表 7-4），『婦人之友』誌読者の設計した住宅に，〈和〉や〈両〉がみられる。

「ベッドですとかたづけられませんから，割合室を經濟に用ふことが出来ません」（1924. 11.P98）のような記述もみられ，部屋の転用性や融通性の問題もあったと考えられる。

表 7-4 私室空間の和洋の経年変化(設計者の種類別)

西暦(年)		'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24	'25	'26	'27	'28	'29	'30	'31	'32	'33	'34
年号(年)		明治 ₄₁	42	43	44	45	大正 ₂	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和 ₂	3	4	5	6	7	8	9
読者	〈和〉							16			1					1	4			1							2	
	〈両〉														3		1										1	
	〈洋〉														2	4	4		1			1				1	3	
	他・不明							1							6	3	1		1			1						
専門家	〈和〉																	1			1		1			1		
	〈両〉																	4										
	〈洋〉				3											1	1	2	2		3				2	3		
	他・不明																	5			1	1	5				5	

（平塚）らいてうは「砧村に建てた私たちの家」（1927.1.P102～106）を紹介し，他の部屋が全室洋室であるにもかかわらず，自分の「書^マ斎」を床の間付きの和室にしたことについて，「人はその表面の矛盾と不徹底とを笑ふことでせふ」「けれど，疊の上でなければ私の心は本當には落ち着けないのです。ほんとうの考へも出て来ないのです」と率直に述べている。

「老人室」にはとりわけ〈和〉が多く，関連記事中にも「老人のある家では疊も必要」（1912.4.P20）のように配慮が述べられている。

ただ「子供室」については，比較的〈洋〉が多い。幼い子どもの部屋には〈和〉もみられるが，児童期にかかる子どもについては，収納の工夫やベッドの使い方などについての記事がみられ，「子供室 床はコルク敷として，その上に莫^マ産」（1933.10.P96），「（子ども室の）床は轉んでもよいやうに是非コルク張りにしたい」（1921.5.P61）のように，洋室コルク張りが好まれていたようである。

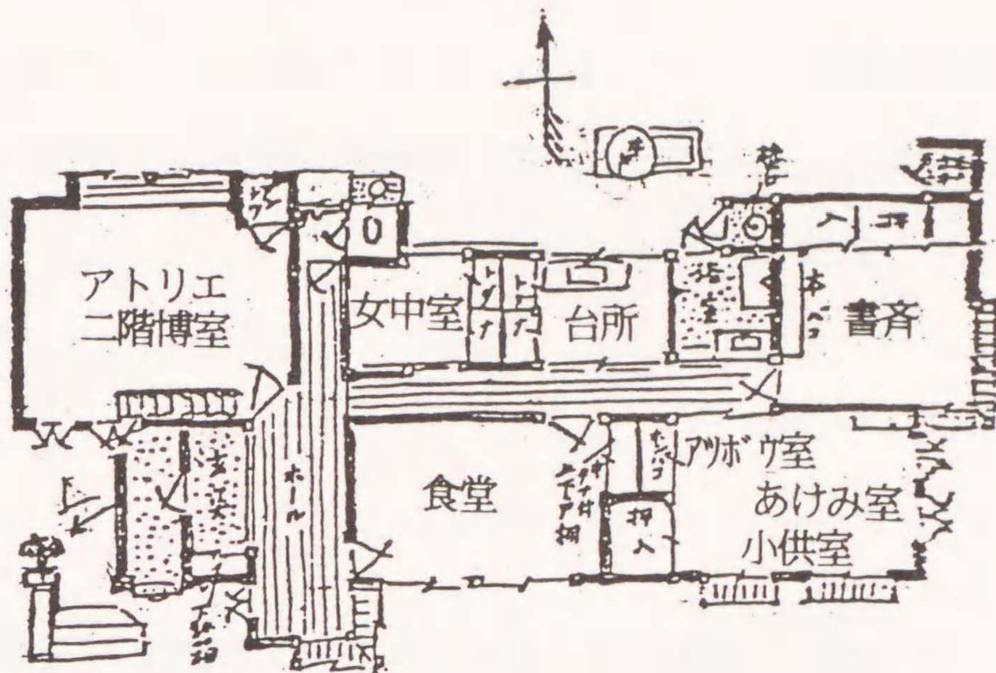


図 7-6 大内章正 砧村に建てた私たちの家（らいてう）（1927）

また「差當り老人や女中などが不便であらうと思ひ，老人室，女中室と二階の予備室とを疊敷にしたい」（1923.5.P94），「客用寢室兼病室を疊敷きに」（1921.5.P62）のように，「女中室」や「予備室」にも和室を求めるものも多い。

ま と め

大正期を中心としたデモクラシー期の『婦人之友』誌の住生活関連記事と住宅の平面図を分析した結果，起居様式について，つぎの点があきらかになった。

1. 専門家の記述では，すくなくとも大正時代中期までは和洋折衷住宅よりも純粋な洋風住宅をよしとするものが多い。
2. 『婦人之友』誌読者の記述には洋風住宅へのあこがれがみられるが，同時に性急な洋風化への躊躇もある。接客空間には積極的に洋風を取り入れているが，だんらん空間や私室空間には和室志向も強い。
3. 明治時代のおわりから大正時代のはじめにかけては，『婦人之友』誌読者の設計した住宅には＜和室住宅＞が，専門家の設計した住宅には＜洋室住宅＞が多かったが，どちらも大正時代の中期ごろから＜混在住宅＞が多くなる。

これらのことから、つぎのようにいえる。住宅の洋風化を進めようとする専門家の提案に対して、『婦人之友』誌読者の方は現実の生活に柔軟に対応しようという考えが強かった。洋風住宅にあこがれ、接客空間には好んでこれを取り入れるが、だんらん空間や私室空間・予備室などには和室も志向するという『婦人之友』誌読者の現実的な対応が、専門家の設計にも影響をおよぼしていった様子があきらかになった。

注および引用文献

- 1) たとえば建築雑誌, 142・144(1898)で, 岡本葦太郎・北田九一が「和洋折衷住家」を提案し, 253(1908)では, 田邊淳吉が「西濠洲の住家」を紹介している。
- 2) 木村徳國, 中廊下形・居間中心形住宅様式の史的位罫, 北大工学部研究報告, 21, 154~162(1959)によれば, 1916年に「中廊下型」住宅が成立し, 1922年に「居間中心型」住宅が成立したが, 1931年頃にこの両者が融合する。
- 3) 矢橋賢吉, 建築雑誌, 203, 496~521(1903)
- 4) 建築雑誌, 419, 506~519(1921)
- 5) 建築普及會, 文化村住宅設計圖説, 鈴木書店, (1922)
- 6) 平面図の名称に, 「黒崎貞彦氏の設計圖」, 「高橋 泰氏の住宅設計圖」とあるが, この平面図が掲載されている記事「三四千圓で出来る小住宅の設計」には, 遠藤 新の設計の弁と, 高橋 泰の「生活するものゝ立場から」の記事がふくまれており, 設計者が遠藤 新であることがわかる。
- 7) うち1例は丸木造りの別荘であり, もう1例は76坪の大邸宅であるために, 第5章から第7章の分析には含まれていない。